東北地方における地域振興プロジェクトの性格と 拠点施設群の設置パターンについて

(農山村地域における拠点施設の計画的研究 その1)

PROJECTS FOR AUTONOMOUS PROMOTION AND SYSTEMS OF ARRANGING ESTABLISHMENTS FOR THEM MAINLY IN THE CASE OF TOHOKU DISTRICT

(Study on basic establishments for autonomous promotion in rural areas Part 1)

山田 晴義*, 谷津 憲司**, 高橋 隆博***, 黒澤 学****, 鈴木 孝男*****

Haruyoshi YAMADA, Kenji YATSU, Takahiro TAKAHASHI,

Manabu KUROSAWA and Takao SUZUKI

This study is aimed at examining what the basic establishments erected for autonomous promotions of rural areas should be planned. The followings are clarified in this report.

1. Type of the projects for promoting development is analyzed by the industrial resources made use of, the aims of projects, and the means to achieve projects. As the result, three types of project are recognized.
2. The basic establishments for projects are composed of three elements: "core", "part" and "satellite".
3. Pattern of arranging establishments can be classified into four types by the ways of advancing projects.

Keywords: basic establishment, autonomous promotion

pattern of arrangement, type of project, rural area,

拠点施設, 内発型地域振興, 設置パターン, プロジェクトタイプ, 農村地域

1. 研究の目的と方法

昭和40年代当初には、我が国の農山村で人口流出による過疎化が深刻な問題として広く認識されるようになった。これに対して自治体を中心になって行ってきた地域振興策は企業誘致や観光開発が主流で、それも外部資本の導入を期待する例が少なくなかった。しかし、地域によっては、こうした対策の導入が困難であったり、実施されても必ずしも地域経済を活性化する特効薬とはならないということに気づき、もう一度地域が持つ資源を見直して価値化し、自前の資本と地域自らの発想による振興策に取り組む自治体が増えてきたのは、一部を除くとこの10年ほどのことである。

近年になり、我が国の各地でこのような地域振興のためのプロジェクトが展開され、これに対応して様々な施設整備が行われてきた。しかし、それらの施設はこれまで以上に多様な機能が複合されるようになり、その計画方法について新たな検討が必要になってきたものの、充分な研究が行われていないまま整備が行われてきた。な

かには施設計画の善し悪しが地域振興策や関連のプロジェクトの成否を左右しているケースも多く、従って、地域振興策のためのプロジェクトと関連する施設計画の在り方を検討することは、農村計画にとって重要である。

本研究の対象とするプロジェクトは、農林業を含む地域経済や定住促進のための地域振興策として行われたものであり、地域の資源を活用し、整備に要する資本や運営・経営の主体が自治体や農業協同組合など地元であるものとした。^{*1)} ここでは、このようなプロジェクトを「内発型プロジェクト」と呼び、地域外の企業が中心になって資本を投下して行う開発や地域資源の活用を前提としていないものと区別した。なお、対象としたプロジェクトは、活用される資本の一部に国県の補助金や起債などの支援が含まれていることも少なくない。また、地域資源に対する付加価値形成の技術や計画の手法が他地域の事例を一部真似ていても、外部の資本や手法をそのまま受け入れるだけではなく、地域で主体的に検討を加えた過程が含まれている場合は対象に含んでいる。特産

* 東北工業大学建築学科 教授・工博

** 東北工業大学建築学科 助教授

*** 東北工業大学建築学科 助手

**** ㈱地域計画研究所

***** 東北工業大学建築学科 大学院生

Prof., Tohoku Institute of Technology, Dr. Eng.

Assistant Prof., Tohoku Institute of Technology

Research Assoc., Tohoku Institute of Technology

Chiiki Keikaku Kenkyujo, Inc.

Graduate Student, Tohoku Institute of Technology

開発やその消費拡大など直接地域の経済活性化をねらうのではなく、地域イメージの向上を図り、地域への入り込み数や交流人口の増加を期待するような間接的な活動も含めた。なお、純粋に住民福祉その他の生活サービスの向上を達成しようとするものは対象に中に含んでいない。また、本研究が対象としたプロジェクトには、それにとりかかる当初の位置づけから次の2タイプがあるものと考えられる。一つは地域経済全体に影響を及ぼす重点プロジェクトで、多くの関連分野と連動した施策が展開されているケースである。他の一つは、当初は明確な重点プロジェクトを持たないものの、特定の拠点施設やソフト事業などの導入を機会に地域の経済活性化や経済再編などを目的として広く関連分野の振興を促すための対策を展開するものがあり、朝日町、温海町、涌谷町、村田町の各プロジェクトが該当する。しかし、地域経済に広く、また強く影響を与える意図を持たない単発的な施設整備は対象としていないことから、*2) いずれも自治体を代表するプロジェクトになっており、また活用資源

やプロジェクト展開の方法などで特に異なった特徴が見られないことから、ここではこの二つのプロジェクトを区別して検討を進める方法をとっていない。

本研究は、上記に示したような地域振興のためのプロジェクトに対応して整備される施設を総称して「拠点施設」*3) とし、それらのプロジェクトとこれに対応して整備される施設計画の在り方を検討するものである。そのために、本稿ではまず、拠点施設の機能などを規定していると思われるプロジェクトの目標・性格並びに展開方法を把握し、これからプロジェクトの類型化を行う。次に地域内に複数設置されている施設を、プロジェクトにおける位置づけから整理するとともに、地域内の施設群の設置パターンの検討を行う。最後にプロジェクトと拠点施設の設置パターンとの関連について分析し、施設が地域内に設置される原理とその構成方法を明らかにするための糸口を探る。本研究では、本稿の検討に引き続き次稿にて拠点施設の機能構成と空間構成の形式について分析し、施設の建築計画の方法について検討する。

表-1 調査地域の概況

プロジェクトの タイプ名 注1)	○県・町村名 (プロジェクト名)	○地域環境／母都市への 距離 km・注2)、地形 と環境 (可住地面積比 率 %・注3)	産業 業 特 性 (農業粗生産額万円／総農家数) 注4)	a)人口 b)同増減率 c)一次産業就業者率 d)高齢者率 注5)
総合的 展開 型	①青森県田子町 [日本一 ニンニクのまちづくり]	八戸市へ40km、山間地 自然景観良好(14.1)	<農業立地地域>(605) ニンニク 畜産生産大	a) 8,106 b) △8.7 c) 49.3 d) 17.7
	②山形県朝日町 [のんばかの森]	寒河江市18km、中山間 地域、自然景観良好 (27.3)	<農業立地地域>(398) りんごなど 果樹盛ん、水稲、畜産の生産額も 大	a) 10,417 b) △6.2 c) 41.8 d) 22.4
	③宮城県津山町 [木工芸の里づくり]	石巻市23km、山間地域 (11.9)	<林業立地地域>(110) 林業が基 幹産業。農業基盤脆弱で兼業多い	a) 4,915 b) △2.8 c) 15.4 d) 19.8
	④福島県三島町 [歳時記の里づくり・生活 工芸運動]	会津若松市35km、山間 地域、自然景観良好 (11.9)	<農外就業依存地域>(72) 林業の 他従来は桐材の供給地として生計	a) 2,888 b) △15.0 c) 16.1 d) 26.2
経済拠点形成 型	⑤秋田県藤里町 [ワインとサホークのまち づくり]	能代市30km、山間地域 自然景観良好(13.1)	<農外就業依存地域>(187) 農業 基盤脆弱、従来から鉱山や林業労 務に依存	a) 5,291 b) △9.4 c) 38.8 d) 21.4
	⑥山形県温海町 [山海バザール]	鶴岡市28km、山間地域 海に面し、景観良好 (11.6)	<農外就業依存地域>(183) 農業 基盤脆弱海岸部は漁業、山間は林 業。温泉観光あり	a) 12,350 b) △12.1 c) 21.3 d) 21.1
	⑦新潟県高柳町 [住んで良し訪れて良しの まちづくり]	柏崎市20km 山間地域 自然景観良好(14.8)	<農外就業依存地域>(110) 特に 目立った産業形成なし	a) 3,143 b) △25.9 c) 46.0 d) 25.9
イメ ージ 拠点 型	⑧宮城県涌谷町 [わくや万葉の里づくり]	古川市17km、平坦地域 (56.1)	<兼業農業地域>(405) 稲作中心 で兼業農家多い。誘致企業多い	a) 20,871 b) △2.1 c) 28.4 d) 14.5
	⑨宮城県中新田町 [あゆ の里づくり・宇宙村構想]	古川市10km、中山間地 域(44.2)	<兼業農業地域>(359) 稲作中心 で兼業農家多い。誘致企業多い	a) 14,189 b) △2.2 c) 20.5 d) 15.7
	⑩宮城県村田町 [歴史と文化の香るまちづ くり]	仙台市27km、中山間地 域(32.0)	<農外就業依存地域>(190) 農外 就業依存大、工業団地あり、誘致 企業多い	a) 13,632 b) 2.0 c) 23.8 d) 16.3

注1) プロジェクトのタイプについては後述(表-5)

注2) 母都市への距離は主要道路の利用による。

注3) 可住地面積比率が50%以上の地域を<平坦地域>、20%以上50%未満の地域を<中山間地域>、20%未満の地域を<山間地域>とした。

注4) 農業粗生産額は1990年農業生産統計、農家数は1990年農林業センサス。<農業立地地域>、<農業兼業地域>及び<農外就業依存地域>の区分は、農業粗生産額と「農業粗生産額／農家数」の値と地域の立地環境による。<林業立地地域>については、上記の農業生産に関わる値に加えて、地域の林業への歴史的な位置づけ、人工林率、林業関連事業数による。

注5) a. 国調1990年 b. 国調1990/1980(%) c. 国調1990年の一次産業就業人口比率(%) d. 国調1990年の65歳以上人口比(%)

2. 調査の方法と対象の概況

本研究は、内発的な地域振興をテーマとしたプロジェクトに取り組んでいる自治体を抽出し、その展開過程と拠点施設の計画について調査している。調査の対象は東北各県と新潟県内で、他の自治体などから評価されていたり、マスコミなどで採り上げられるなど一定の社会的な評価を得ていると見られる自治体とした。また、調査対象は具体的なプロジェクトに取り組みはじめてから少なくとも3年以上年月を経過し、現在も関連の活動を継続しているものとした。なお、整備が完了していないプロジェクトについては、将来の計画も含めて調査を行い、計画が明らかにされている範囲で検討を行っている。しかし、本調査の対象の選定方法から考え、必ずしもプロジェクトとその拠点について全てのタイプについて網羅しているとは考えていない。より一般性が高く、また、より多くのタイプを網羅した結果を得るために、新たな調査が必要となるが、本報告はそれら今後の調査研究のための方向を提示することを主な目的とする。

調査の方法は、対象の自治体における計画担当者及び拠点施設等の管理責任者からの聞き取り調査、現地踏査及び必要な資料の入手による。調査の対象は10の自治体(町)で、その地域特性を表-1に示す。ここでは、地域資源の活用や地域振興のプロジェクトが、地形とこれに規定される農林業などの産業や母都市との関係に強く影響を受けることに着目して調査地域の類型化を行い①一次産業就業者率が高くかつ農業生産額の高い「農業立地地域」、②一次産業就業者率は低い「農業生産額が高い」「兼業農業地域」、③農業生産額が低い「農外就業依存地域」、④地域産業が歴史的に林業の影響を強く受けてきた「林業立地地域」に分けた。その結果は表-2の通りとなるが、ここでは調査例数が少ないことから①と③をまとめて「農林業立地地域」とした。農業と林業を基盤とする地域を一つにまとめることには問題があるが、このグループに属する田子、朝日、津山の3町とも山間地域或いは中山間地域に含まれ、比較的似た地域環境と生産基盤を持つこと、農業と林業の違いはあっても一次産業の振興のために、その範囲拡大を図るという地域振興に対する共通の考えを持つことなどから、一つのグループとした。なお、調査の対象は、本研究の趣旨から、公共性・公益性のある地域振興を対象としており、

行政が事業主体となるプロジェクト中心となるが、なかには補助事業などの条件から農業共同組合(以下農協と略)などの地域団体が事業主体になるものも含まれている。朝日町では、農政の展開で行政と農協の連携が良いこと、農政に対する農協の影響力が強いことから、同町の「のんぼかの森」は農協のプロジェクトであると同時に全町レベルの重要なプロジェクトとして位置づけられている。なお調査対象地域は、プロジェクトのタイプ別に「総合的展開型」「経済拠点型」「イメージ拠点型」の順に配置してあるが、その類型化の検討結果は後述する。

3. プロジェクトの構成

(1) 活用資源

調査地域におけるプロジェクトの概要は表-3の通りである。また、プロジェクト実施のために活用された資源を、主資源と補完資源によって整理すると表-4のようになる。調査対象の範囲では農業立地地域の朝日町と田子町は共に農業資源を、また林業立地地域の津山町は林業資源を主資源としており、これらは地域の存立基盤であった農林業を主資源としてプロジェクトが展開されている。農外就業依存地域では、山間地域に属する4町のうち3町までが、地域で育まれてきた生活技術や生活文化(以下「生活文化」とする)を、また、他の1町では自然環境を主資源としており、地域を特徴づけている資源が活用されている。兼業農業地域では、いずれも上記以外の地域内に残された歴史的資源などを主資源として取り組んでいる。補完資源については、地域特性との関係から一定の傾向を読み取ることは難しい。

(2) プロジェクトの目標

プロジェクトの目標は、その多くが産業振興或いは就業機会の創出を含む定住条件の整備などであると同時に、かなり多様かつ複合的であるが、ここでは各プロジェクトで達成しようとしている直接的かつ重要と思われる目標に着目し、①農林業など地域の基幹産業の一層の振興を図ろうとするもの、②地域で活かされていなかった資源に付加価値を与えて直接経済化に結び付けようとするもの、③地域で活かされていない環境などを整備して地域外へのアピールを行い、結果として地域への入り込みを図るなどにより経済活性化を図ろうとするものの3つに分け、それぞれ、ア)農林業範囲拡大型、イ)資源経済化型、ウ)地域イメージ拡大型、と呼ぶ。以下に各タイプの解説と該当する地域を示す。

ア)農林業範囲拡大型＝一次産業としての農林業だけでなく、二・三次産業へとその範囲を拡大して経済活性化を目指すもの。農業については田子町、朝日町が該当する。津山町では、林業振興を目的としてして、素材の生産だけでなく木工芸品などのモノづくりを通して総合的

表-2 地域型の整理

地域型	地形	平坦地域	中山間地域	山間地域
農林業立地地域			朝日町	田子町 津山町
兼業農業地域		涌谷町	中新田町	
農外就業依存地域			村田町	藤里町 温海町 三島町 高柳町

表-3 調査地域におけるプロジェクトの概要

タイプ	地域	プロジェクト名(その種別)	主な活用資源	目標	実現方法
総合的展開型	① 田子	日本一にんにくのまちづくり(重点)	①農業資源 ②自然環境	農業範囲の拡大(注2)	①交流 ②人材育成 ③特産形成(農林産物) ④入り込み拠点整備
	② 朝日	のんばかの森(特定)	①農業資源(リンゴ他) ②生活技術・文化	農業範囲拡大	①生活技術等再生価値化/生活環境農業(注3) ②入り込み機会創出
	③ 津山	木工芸の里づくり(重点)	①林業資源(間伐材)	林業振興とその範囲拡大	①特産形成 ②人材育成 ③入り込み拠点整備
	④ 三島	①歳時記の里づくり ②生活工芸運動(重点)	①生活技術・文化 ②林産物資源(桐材) ③自然環境	地域資源の見直し・価値化	①生活技術等再生・価値化 ②交流 ③入り込み拠点整備
経済拠点形成型	⑤ 藤里	ワインとサホークまちづくり(重点)	①自然環境 ②農林業資源(山ブドウ他)	地域への入り込み機会拡大	①特産形成(農林産物) ②入り込み拠点整備
	⑥ 温海	山海バザール(特定)	①農林業資源 ②生活技術・文化	特産形成拠点づくり	①入り込み拠点の整備(展示・販売ほか)
	⑦ 高柳	住んで良し、訪れて良しのまちづくり(重点)	①生活技術・文化 ②地域環境(自然、集落、温泉)	地域への入り込み機会拡大	①入り込み拠点整備 ②生活技術等再生・価値化(含特産形成)
イメージ拠点型	⑧ 涌谷	わくや万葉の里づくり(特定)	①歴史資源(古代史跡)	地域イメージの向上	①歴史的環境整備 ②入り込み拠点整備
	⑨ 中新田	①あゆの里づくり②宇宙村構想(重点)	①新提案施設(注1) ②歴史資源(既存施設)	地域イメージの向上	①新提案施設の整備 ②既存施設活用 ③入り込み拠点整備
	⑩ 村田	歴史と文化の香るまちづくり(特定)	①歴史資源(近世の町並み、城址)	地域イメージの向上	①歴史的環境の整備 ②入り込み拠点整備

注1)「新提案施設」とは、農村で高度な音楽ホールの設置により新たな文化的拠点性を創出したことを指す。
 注2)「農業範囲拡大」とは、農業を一次産業としてだけでなく、二・三次産業の資源としても活用されることを意図とし「農産物加工・販売」など、地域で農家が古くから自給など日常生活のために、地域の生態に則して行われてきた庭先農業、生態的農業を現在生産農業と対比して地域がネーミングしたもの。関連する生産技術も含んでおり、特に高齢者の能力を評価している。朝日町でのプロジェクト立案検討の過程で使われた造語。

(3) 目標の実現方法

プロジェクトの特性を明らかにするために、その実現方法を把握する必要がある。実現方法は拠点施設の整備をはじめとして優先的に取り組む事業に着目して分けると、①農林業をはじめとする経済活性化を実現するために、人材育成、交流、特産形成、拠点整備などを総合的に展開しようとする「総合的展開型」、②地域資源などを直接経済効果に結びつけるための拠点形成を優先的に行うとする「経済拠点形成型」、③直接的な経済効果よりも地域イメージを高めることを優先する「イメージ拠点型」の3つに分けられる。「総合的展開型」は田子、朝日、津山、三島の4町が、「経済拠点形成型」は藤里、温海、高柳の3町が、また「イメージ拠点型」は涌谷、中新田、村田の3町が該当する。

プロジェクトの目標と実現方法との関係は表-5のようになる。例数の点から一般化は出来ないが、地域イメージの拡大をねらう3町ではイメージ拠点型の方法を取り、農林業の範囲拡大をねらう3町は総合的展開型の実現方法をとっている。資源経済化をねらう4町のうち、3町が経済化拠点を形成する方法をとるが、三島町では総合的展開の方向をとっている。このように、プロジェクトの目標と実現方法には一定の関連が見られるが、同種の目標をもつプロジェクトでも、自治体によって異なった実現方法をとるケースもみられる。

表-4 活用資源の構成

主資源→ (補完資源)	自然環境	農業資源	林業資源	生活文化	歴史資源	その他
(自然環境)		田子		三島		
(農業資源)	藤里			温海	涌谷	
(林業資源)			津山			
(生活文化)		朝日				
(歴史資源)					村田	中新田
(その他)				高柳		

な経済活性化を目指している。

イ) 資源経済化型=三島、高柳、温海の3町では、従来から生活や生産の中で育まれてきた生活技術・文化の再生・価値化を図ることを基本的な目標にして地域振興を展開し、あわせて自然環境の活用による入り込み数の拡大をねらっている。藤里町では、地域への入り込み数拡大を期待し、自然環境をいかながら特産形成とあわせて総合的に経済活性化を目指している。

ウ) 地域イメージ拡大型=涌谷町、村田町、中新田町は歴史的資源などの活用により地域イメージを高めることを目的としている。

(4) 地域特性とプロジェクトとの関係

以上の検討結果を踏まえてプロジェクトのタイプと地域特性との関係を見ると、山間域または中山間地域で農林業立地地域にあたる3町では、いずれも農林業範囲拡大を目標とし、実現のために総合的展開型の方法をとっている。村田町を除いた山間地域や中山間地域の4つの農外就業依存地域では、生活文化や自然資源の経済化を目標として経済拠点形成型のプロジェクトを展開しているが、三島町だけは総合的展開型の方向をとっている。地方中枢都市圏に含まれる平坦地域の兼業農業地域（涌谷町、中新田町）と村田町の3町は、歴史資源などを活用して地域イメージ拡大を目標とし、そのための拠点づくりを展開していることがわかる。このように、調査の例数が限られた範囲でも、地域特性とプロジェクトとは比較的明確な関連が見受けられると共に、そうした地域特性に関わりのあるプロジェクトが内発型地域振興策として評価されていることが裏付けられる。

以上の地域特性、プロジェクトの目標とその実現方法の3つの関係を整理すると表-6のようになる。なお、プロジェクトのタイプ化については、本研究が拠点施設計画のあり方を明らかにすることを主たる目的とすることから、拠点施設整備の考え方を反映しているプロジェクトの実現方法による類型を採用し、「総合的展開型」「経済拠点形成型」「イメージ拠点型」の3つに分けて以降の検討を行う。

表-5 プロジェクトの目標と実現方法

実現方法 目標	総合的展開 型	経済拠点 形成型	イメージ 拠点型
農林業範囲 拡大型	田子、朝日 津山		
資源経済化型	三島	藤里 温海、高柳	
地域イメージ 拡大型			涌谷、村田 中新田

表-6 地域型とプロジェクトタイプとの関係

地域型	プロジェクトの目標	プロジェクトの実現方法
農林業立地地域 (田子、朝日、津山)	農林業範囲拡大型 (田子、朝日、津山)	総合的展開型 (田子、朝日、津山)
農外就業 依存地域	(三島) → (三島) (藤里) → 資源経済化型 (温海) (藤里、温海、高柳) (高柳) (村田) → (村田)	経済拠点形成型 (藤里、温海、高柳)
兼業農業地域 (涌谷、中新田)	イメージ拡大型 (涌谷、中新田)	イメージ拠点型 (涌谷、中新田)

— は地域型、プロジェクトの目標、プロジェクトの実現方法の相互関係が相対的に強い型と見做す。〔 〕内は該当の自治体。()内はこれ以外の自治体。

4. 拠点施設群の構成と設置パターン

(1) 拠点施設群のタイプ化

拠点施設は大半の地域が複数の施設で構成され、地域全体における構成の形式は複雑であり、まず拠点施設群の構成パターンを認識し易くする必要がある。ここでは地域振興のために整備される拠点施設群を、プロジェクトの主たる目標における位置づけ、地域内外への発信力・影響力、経営主体、投資規模などの大小から、①コア、②パーツ、③サテライトの3種類に分類した。

「コア」は、それぞれのプロジェクトの経営・運営上の中枢機能或いはプロジェクトの特徴や成果を発信するための展示・販売、交流、学習・体験・集会・研修機能、プロジェクト実現のための試験・研究・開発機能などのうち、プロジェクト実現のための重要な機能を含む施設或いはこれを含む地区とした。しかし、役場、農協や森林組合などの事務所施設内部に含まれる指導機能については除外した。中には上記の性格を有するコアを複数持つ地域も見られる。

「パーツ」は、コアの活動を支えるための部分的な単一機能の他工場・作業所、共同農場・牧場などで、必ずしも当初から当該の地域振興のために整備された施設でなくとも、プロジェクトを構成する上で不可欠な機能を持つ生産施設もここに含めた。但し、パーツは公共的機能が整備した施設とし、かつ運営・経営が住民であっても共同で組織を構成して運営しているものとし、次に示すサテライトと区別した。

「サテライト」は、地域住民とその家族が個々に営む工房、農地、民宿施設並びに民間企業施設^{*)}で、地域振興のプロジェクトに関連を持って経営されている施設などを指し、住宅・宅地内部に置かれているものも対象とした。なかには、個人の住宅内であっても、工房の整備などに対して公的支援を受けているものがあり、これらもサテライトに含んでいる。なお、サテライトの大半は地域内に分散しているケースであるが、村田町の町並みを形成している商店街や高柳町の民家集落のように、コアの中に一定のまとまりを持ってサテライトとした商家や農家が存在している場合もある。なお、町並みを構成する商店などについては、特に法人化の有無で区別せず、全てサテライトとしている。

各調査対象の拠点施設とその機能をこの分類に基づいて整理すると表-7のようになる。

(2) 拠点施設群の設置パターン

ここでは、上記した3種の拠点施設が地域のなかになどどのようなパターンで設置されているかの検討を行う。パターン化に当たっては、一つのコアからなる地域で比較的パーツの整備に重点が置かれてきたのを除くと、コアがプロジェクト展開のなかで重要な位置を占め、拠点施設全体の配置に影響を与えてきたことなどから、コアの

数と存在形式に着目してパターン化を試みる。そこで、まずコアが単数か複数かによってタイプを分け、次に、複数のコアを持つものも構成要素が公的な施設で構成されるものと、集落や町並みのような民家などで構成されるものを区別した。以上の方法で拠点施設の設置パターンを整理すると図-1のようになる。なお、同図はパターン化して表現したものであり、コア内部の施設数については図の表現とは一致しない。またコア内部の施設の存在形式についても特定の意味を与えて表現しておらず、その整理・分析は次稿で行う。

対象の範囲では、コアの数は1〜3個からなるが、単一のコアからなる温海町と中新田町は「単一コア型」とした。これらは、どちらかと言えばパーツの整備を重視してきた経緯があり、コアの規模も相対的に小さいこと等を考えると、他の複数コアの地域と区別することは意味がありそうである。

複数のコアを持つ地域のなかで、コアがいずれも公的施設で構成されるものを「複数コア併置型」とし、なか

にはコアが2つであるものと3つのものがあり、前者は朝日、津山、涌谷の3町が、また、後者は田子、三島、藤里の3町が該当する。

コアのひとつが町並みや集落で、その構成要素が個々の商家や農家である場合は、コアの性格が大きく異なることから、複数コア併置型と区別して「サテライト集合コア併置型」とした。このタイプには、村田町と高柳町が該当するが、前者にはパーツが見当たらない。

拠点施設群の設置パターンとプロジェクトのタイプとの関係については、明快な関係を読み取ることはむずかしく、むしろコアの形成過程とプロジェクトのタイプとの間に一定の関係が見られる。

(3) コアの形成パターン

調査地域における拠点施設の設置時期を、プロジェクトの展開過程との関係で示すと表-8のようになる。プロジェクトの多くは、コアの整備を強く意識して展開されることが多く、また、コアの整備結果がその後のプロジェクトの方向に大きく影響を与えるケースも少なくないことから、プロジェクトの展開をコアの形成過程との関係で捉えることは重要である。そのために、ここではコアの設置時期とその動機に着目してコアの形成過程をパターン化してみると以下になる。

ア) 体系的整備型＝地域振興に係わる重点プロジェクトにもとづき、コアを先行して計画的・体系的に整備していくタイプ。藤里町のように、当初は自然資源を活用して利用者の入り込み数を拡大するための施設整備を行っていたが、ある段階で総合的なプロジェクトを策定し、これに従って複数のコアを計画的に順次整備していくタイプ。

イ) 特定コア先行型＝プロジェクトの設定に基づいて特定のコアを先行して優先的に整備し、地域振興に強い刺激を与えたり、活動を誘導していこうとするタイプ。温海町、朝日町、高柳町、涌谷町、村田町などのコア整備がこれに該当する。高柳町を除くと、いずれも特定プロジェクトのもとに整備されるコアが多くを占める。

ウ) コア後設型＝プロジェクトに基づいて活動が展開され、必要に応じて拠点施設の整備を行うが、その過程でコアが必要になって整備するタイプ。津山町の場合は間伐材の活用で林業範囲の拡大を図るためのプロジェクトを設定し、逐次必要な拠点を整備していくという方法をとったが、コアを当初から計画するのではなく、プロジェクトの進展とともにコアの必要性を感じ、その段階で整備している。田子町や三島町でも、プロジェクトの当初からコアを計画するのではなく、内発型の地域振興に必要と思われる対策を多様に展開し、これに対応するソフトづくりや拠点施設を整備しており、中間期にそれまでの活動の評価を含めて地域振興の全体を見直し、必要なコアを整備している。

図-1 拠点施設群の設置パターン

注) 茅葺き民家の個別整備は、「茅葺き民家集落」の整備と別途にそれ以前から町の補助で行われていた。

エ) 施設・環境整備型＝プロジェクトに対応したコアその他の拠点施設を整備することを前提としないで、地域環境やストックの見直しを積み重ねながら、必要に応じて新たな施設整備を加えていくタイプ。中新田町では、首長の発想でバッハホールなどの新たな提案施設の整備を行い、その周辺に施設が集積してコア化しているが、町内の既存施設を生かして複数の拠点施設を整備することに力を注いできた。

以上の4つの形成パターンのうち体系的整備型と施設・環境整備型は、それぞれ1地域ずつの例数で一般性を欠くが、他の2タイプとの違いは明らかで、また論理的には十分発生しうるパターンであると考え、あえて挙げることにした。

5. プロジェクトとコアの形成パターンとの関係

本稿では、前半で地域振興のプロジェクトの構成について、その目標と実現方法からタイプ化を試み、後半では拠点施設群の整備方法をその設置パターンとコアの形成パターンから整理した。次に、プロジェクトと拠点施設群の設置との関係について検討する必要がある、ここでは大半のプロジェクトにとって重要な位置を占めるコアの形成を媒介にその検討を試みる。そこで、プロジェクトの実現方法とコアの形成パターンの相互関係をみると表-9に示すようになる。

その結果によれば、「総合的展開型」のプロジェクトでは4例中3例が「コア後設型」のコア形成パターンで、1例の「特定コア先行型」を除くと、広範な内容を含む「総合的展開型」のプロジェクトでは、コアの形成が中後半の時期になることが分かる。「経済拠点形成型」のプロジェクトでは3例中2例が、また「イメージ拠点型」のプロジェクトでも3例中2例が「特定コア先行型」であり、「特定コア先行型」のコア形成パターン5例のうち4例が「経済拠点形成型」或いは「イメージ拠点型」のプロジェクトの実現方法をとっている。これは活動を地域外にアピールしたり、地域への入り込み数の拡大をねらいとするプロジェクトでは、特定のコア整備を先行させるようなコア形成のパターンがとられる傾向がみられる。表-9では、プロジェクトの実現方法とコアの形成パターンとの間には多様な組み合わせも存在するが、上記のような一定の関係を読み取ることができる。

6. まとめ

本報告では、まず内発型の地域振興のためのプロジェクトをタイプ化し、地域特性との関係を検討した。その結果、農林業などの地域産業の基盤が比較的安定しているものの、大きな都市から離れた位置にあって、安定的な兼業機会を得にくい3地域では、人材育成、交流、特産形成、拠点整備など多様な活動を総合的に行う「総合的

表-9 プロジェクトの実現方法とコアの形成パターン

コア形成パターン プロジェクトの実現方法	体系的 整備型	特定 コア 先行型	コア 後設型	施設・環 境整備型
総合的展開型		朝日町	津山町 田子町 三島町	
経済拠点形成型	藤里町	温海町 高柳町		
イメージ拠点型		村田町 涌谷町		中新田町

展開型」の展開方法がとられている。これは、従来の農林業の限界を越え、その資源の活用範囲をより広いものにしていくとする発想が基礎となっているが、山間や中山間地域で安定的な農林業を形成してきた人材の蓄積も影響し、経済活性化に不可欠な人材育成の取り組みをあわせて展開してきた結果と考えられる。一方、農林業などの生産基盤が脆弱であってしかも大都市圏から遠い4地域のうちの3例は、自然環境を活かしながら地域資源への付加価値を高めて特産形成を図ると同時に、地域への人の入り込み拠点の形成によって経済活性化を実現しようとするプロジェクト（経済拠点形成型）をとっている。しかし、この場合は農林業を形成する力が不十分な地域での特産形成の取り組みという矛盾から、結果的に入り込み数の拡大の方に力が注がれたことは当然と言える。これらに対して、大都市圏内に含まれる兼業農業地域や農外就業依存地域である3地域では、いずれも地域に偶然残された歴史的資源に付加価値を与えるなどの整備を行い、地域イメージを高めることにより地域の魅力を高め、地域定住を誘発する手段として「イメージ拠点型」のプロジェクトが展開されている。

こうしたプロジェクトに対応して整備される拠点施設群を、プロジェクトの目標を実現するために重要なコアやこれらを部分的或いは専門的に支えるパーツ、このプロジェクトに参画する農家や商家などをサテライトと分け、それらをコアを中心とした構成方法から拠点施設群の設置パターンを整理した。その結果、10例中8例が2ないし3箇所のコアを持ち、このなかで公的施設群で構成されるコアを持つ「複数コア併置型」が6例、「サテライト集合コア併置型」が2例あった。コアが1箇所である「単一コア型」の2例は、どちらかといえばパーツを中心に拠点施設が整備されてきた。

コア形成のされ方をパターン化すると、10例中5例が「特定コア先行型」で、反対に「コア後設型」が3例、「体系的整備型」と「施設・環境整備型」は1例ずつになる。プロジェクトのタイプとコアの形成パターンとの関係は、「コア後設型」のコア形成パターンの3例がい

ずれも「総合的展開型」のプロジェクトの実現方法をと
り、「特定コア先行型」のコア形成パターン5例のうち
4例が「経済拠点形成型」と「イメージ拠点型」のプロ
ジェクトの実現方法をとるなど、相互に一定の関係を見
ることができる。しかし、一方では相互関係に多様性も
見られる。その理由としては、研究対象が多様な地域性
と人材を有し、しかも地域振興の方向を提示しにくい今
日の農山村では、試行錯誤を繰り返さざるを得ない状
況にあり、結果的に地域振興策とその拠点施設群の計画
は多様なものとなり、また、プロジェクトのタイプとコ
ア形成のパターンの関係も多様性を持つことになるもの
と考えられる。

本稿では、プロジェクトのタイプ化と拠点施設群のパ
ターン化、及び両者の相互関係の分析を通じて、地域振
興プロジェクトと拠点施設の設置計画の研究の糸口を探
ることができたと考えたい。ただ、限られた事例での結
果であることから、今後更に多くのプロジェクトの検証
を通じて、精度を高めていく必要がある。

注

*1) 対象が農山村地域であることから、農水省の補助事
業が活用されることが多く、構造改善事業のように農協
が事業主体になるケースも多い。これらのほかに、森林
組合などの協同組織による事業も含んでいる。

*2) 本調査は、農水省の補助金行政により、自治体にお
ける事業メニュー対応型の施策が多いなかで、総合的な
振興策を持って取り組もうとしている地域のプロジェクト
を対象にしている。

*3) 拠点施設には、公共施設の他にプロジェクトに関連
して整備された個人の民家や工房、企業施設なども含ん
でいる。

*4) 田子町のニンニクのまちづくりに関連して誘致され
た入浴剤の製造企業のほか、涌谷町の笹竹神社の経営す
る施設などが該当する。

参考文献

1) 山田晴義、谷津憲司、高橋隆博：地域施設の再編に
関する計画的な研究（その1、施設計画に関わる諸条件の
変化と研究課題）日本建築学会大会学術講演梗概集E、
pp.1035-1036,1992.8

2) 山田晴義、高橋隆博：地域施設の再編に関する計画的
研究（その2、過疎市町村内集落における高齢者関連
サービス及び活動要求）日本建築学会大会学術講演梗概
集E、pp.1207-1208,1993.9

3) 佐藤浩、山田晴義、谷津憲司、高橋隆博：地域施設
の再編に関する計画研究（その3、複合施設の計画過程
に見られる施設要求）日本建築学会大会学術講演梗概集
E、pp.1209-1210,1993.9

4) 谷津憲司、山田晴義、黒澤学：内発的産業振興のた
めの拠点施設に関する研究（その1、地域特性と町づく
りの課題）日本建築学会大会学術講演梗概集E、pp.121
1-1212,1993.9

5) 黒澤学、山田晴義、谷津憲司：内発的産業振興のた
めの拠点施設に関する研究（その2、コア施設の機能構
成）日本建築学会大会学術講演梗概集E、pp.1213-1214,
1993.9

6) 黒澤学、山田晴義、高橋隆博：内発的産業振興のた
めの拠点施設に関する研究（その3、地域振興のプロセ
ス）日本建築学会大会学術講演梗概集E、pp.1247-1248,
1994.9

7) 山田晴義、黒澤学、谷津憲司、高橋隆博：内発型の
地域づくりにおける拠点施設の構成について、日本建築
学会大会学術講演梗概集E-2、pp.489-490,1995.8

(1995年12月10日原稿受理、1996年7月24日採用決定)